



東京大学東洋文化研究所

Newsletter 2025 春季号

Special Interview

田中有紀 東京大学東洋文化研究所 准教授

●中国哲学との出会い

ー田中先生の専門は中国思想、特に音楽思想ですが、その出会いはどのようなものだったのでしょうか。

音楽との出会いは、中学1年生でミュージカル部に入った時からです。歌ったり踊ったりすることはすごく楽しいなと思いました。演劇が好きで劇団四季も考えましたが、結局そのまま大学を受験しました。漢文を読むのが好きだったので、駒場で中国に関する授業、それも誰も出ないような授業をとろうと思ったのが中島隆博先生（現東文研所長）だったのです。中国語の文法や発音を最初から学びながら、デリダの中国講演の翻訳を読んでいました。



ーたしかにそれは誰も出ない（笑）。しかしこうして中国思想の世界に入っていくのですね。

本郷で中国思想を本格的に学ぶようになると、誰もいない世界を選んだことで逆に窮地に立たされました。同級生はもう一人だけ、古い本の扱い方もわからない、まわりは大学院生ばかりという状況で、東アジア科学史の川原秀城先生の授業に出ました。そこで『礼記』楽記を読み、人間は楽しくなると自然と手や足が動き、舞い、声が出て、それが音楽の起こりになったという記述に出会いました。これは、自分がミュージカルをやっていたときの感覚と同じだとびっくりしたのです。卒論では『礼記』楽記と内容的に重複する部分がある『荀子』楽論を研究テーマとしました。『荀子』は、さらに人間の欲望や本性（性悪説）、儀礼の話へと体系的につなげていきます。修論では北宋の陳暘（1094-1128）の『楽書』を研究しました。この研究を進めているときに、明代の朱載堉（1536-1611）を読み始めたのです。



田中有紀『中国の音楽思想』東京大学出版会、2018年（第36回田邊尚雄賞受賞作）

●朱載堉と十二平均律

ーこうして博士研究、さらにはご著書『中国の音楽思想』の完成につながっていくのですね。

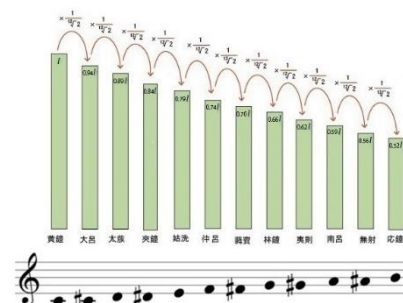
指導教員の川原先生からは、ずっと音律論をやらなければならないと言われていて、卒論、修論を経てようやく取り組むことになりました。中国では、漢代に体系化された三分損益法（ピタゴラス音律）が明代までずっと続いてきました。三分損益法というのは、最初の音をある高さに設定し、笛の長さを決めたあと、それを3分の2にして、さらにそれを今度は3分の4の長さにして、またそれを3分の2にして……これを繰り返して音階を形成するという理論です。しかし、「ド」と1オクターブ上の「ド」の音は、ちょうど笛の長さが半分になってほしいところだけど、この理論ではズレが生じてしまう。これを「往きて返らず」と呼びました。暦や易の六十四卦はちゃんと巡りもとに戻ってくるのに、音楽は止まってしまう、「往きて返らず」になってしまうのは、儒教の理想として好ましくないと考えられていました。

ー「往きて返らず」問題の解決法を考案したのが、朱載堉というわけですね。

朱載堉が考案した十二平均律は、三分損益法のように3分の1をかけるのではなく、等比数列を使います。2の12乗根という数を計算して、長さが等比で並ぶように設定すると、ドレミファソラシまで行って1オクターブ上のドまで戻ってこられる。「往きて復た返る」ことができるのです。朱載堉が十二平均律を記述したのが1584年の『律学新説』であり、それらは天文暦法・舞踏論・数学などを論じた14種の著作とともに大著『楽律全書』（1607年）に収められました。

ー17世紀は西洋でも平均律が考案されましたが、東西交流はありましたか。

この時代は、西洋から宣教師が入って来ているので東西の交流は盛んでした。ただ、朱載堉は現在の河南省あたりに住んでおり、宣教師と交流した形跡もありません。朱載堉の平均律の理論がこの時期にすぐにヨーロッパに伝わったのかどうかについても、文献上は明らかにできないのです。平均律はヨーロッパから伝わったと言う人もいるし、中国から伝わったという人もいますが、独立してそれぞれで微妙な時間差で生まれたというほうがいい。そうした起源論よりも、中国では、三分損益法の「往きて返らず」問題を解決する手段として考案され、ヨーロッパや日本でもそれぞれ異なる背景の中で必要とされ生まれたということを重視した方がいいと思います。

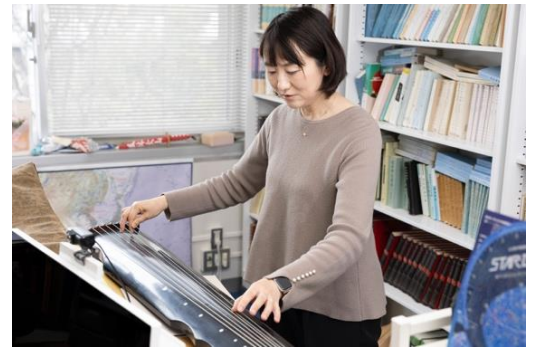


十二平均律の図解（図は田中有紀提供）

●江永の思想——朱子学から考証学へ

ー大変興味深いお話でした。現在はどうのような研究に取り組まれていますか。

清代の江永（1681-1762）の思想研究です。平均律は清代に入るとあまり広く受容されず、三分損益法に戻ってしまうようになります。そのなかで江永だけが、平均律の方がいいのではないかという立場に途中から変わったのです。平均律は、易や暦の思想とも一致して、理想的な理論だと再評価したわけです。江永は、中国思想史において重要な人物であり、朱子学から考証学に転換するときに要になった人だと私は考えています。江永は朱子学者として自己を認識していますが、平均律をとるということは朱熹とは違うということです。また、戴震（1724-1777）という清代の著名な考証学者がおりますが、戴震はすごく江永の研究のしかたを尊敬していて、ここに何があるのかを明らかにすることが今の研究テーマです。



古琴を使って音律論を解説する田中先生。美しい音色が奏でられる。

ー朱子学から考証学への転換期のカギを握る人物ということですね。

江永には『礼書綱目』という本があります。これは、朱熹の「儀礼経伝通解」という本をベースに彼なりの組み替えをしてつくった本で、儀礼に関するいろいろな経典を引きながら注釈を引いて入れていくという形式の本です。江永は、西洋の学問の影響も受けながら、天文学や音楽、数学、度量衡、音韻学、地理学も論じていますが、これら全てが彼にとって礼学なのです。先の『荀子』の話に戻りますが、儀礼の根本は、もともとは人間が欲望して出てきたもので、そこから人間社会の秩序として働くのが礼です。人間社会をどうするか、人間とは何かという問題の中に、そういう科学や技術にまつわる話を入れ込んでくるという思想がとても興味深いです。人間の倫理のなかに技術や科学を埋め込むありさまを、きちんと私が体系的に説明できるようになったら、少し現代的な示唆、ヒントもあるのかなと思ったりしています。

●東アジア藝文書院（EAA: East Asian Academy for New Liberal Arts）という挑戦

ーご自身の研究のほか、田中先生が運営に携わっている東アジア藝文書院（EAA）について教えてください。

そうそう、EAA の宣伝をしなくちゃ（笑）。リベラルアーツとしての東アジア学を目指す—ということですが、私はあえて EAA ではなくて東アジア藝文書院として話せればと思います。藝文書院の「藝文」は『漢書』の藝文志からきたものです。これは、漢代にできた、中国の現存する最古の図書目録です。中国の目録学は、この時代にはこういう本があると紹介するだけではなくて、その時代が目指していた学問を体系的に整理する学問です。秦の焚書があり、漢が興ったけれども、その時点で本はバラバラになっていて、本がバラバラになってくれば学問も、儀礼も、様々な制度も成立しなくなる。社会の全てが崩れていってしまう。こうした状況に危機感を抱いた劉向・劉歆の父子が、本を集め、誤字脱字を直し、目次を定め、書名を定め、書目を作成しました。学問を体系的に整理し、「これが新しい自分たちの学問だ」と提示したのが『漢書』藝文志です。たしかに学術活動に基づき、「東アジア」の伝統に生きながら（単に東アジアの地域研究だけをやるというのではなく）、あらゆる世界に視野を広げ、これが私たちの学問だと世の中に示し、新しい時代を切り開いていく。私たちの「藝文」の活動の意味もここにあるのではないかと思います。

ー「藝文」の意味がずっと腑に落ちました。「書院」の方はいかがでしょうか。

以前、「朱熹と書院：朱熹の弟子たちの学術活動」という発表をしたことがあります。書院は、公的な機関とは別に、私的に議論したり研究したりする場所として、朱子学が民間に広まっていく大きな助けになっていました。朱熹の弟子たちが各地でいろいろな書院に集い、ああだこうだと議論していたというのが南宋の思想史の特徴でした。朱熹としても、書院で対話をするということが彼の思想形成上も重要で、対話によって新しい儒学の流れを生み出したわけです。

『朱子語類』は弟子からの質問に対する朱熹の回答をまとめたものですが、このような風景が書院にあったのではないかと思います。東アジア藝文書院は、駒場でも活動していますが、そこには多くの学生がいて、いろいろな専門分野の教員もおります。自分の専門に閉じこもらずにいろいろな人と対話しながら新しい学問をつくっていく—書院にはそういうメッセージがあると思います。

ー東アジア藝文書院としてシンポジウム「音楽を記す行為の普遍性」も主催（2025年3月9日）されていましたね。

中国の伝統楽器である古琴が重要な役割を果たす『うつほ物語』を、音楽劇にして台本を書き、現代に蘇らせたものです。2月にクアラルンプールで、3月に東京で上演しました。伝統的な平安貴族の衣装も復元し、クアラルンプール公演では中国語で、日本では日本語で上演し歌舞伎役者にも出演してもらいました。東京では学術的なシンポジウムも同時に行いましたが、このような芸術と学術にまたがるような活動は、通常の研究費ではやりにくい部分があります。今回は公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーションと、東アジア藝文書院の潮田総合学芸知イニシアティブから助成をいただきました。このような活動を応援して下さる寄付者の方に支えていただきながら研究をしていますし、特に私が行っているような音楽の研究は、多くの方に知っていただき、一緒に楽しんでいただくことが重要だと思っています。

ーまさに孟子が言うごとく「民と共に音楽を楽しむ」ですね。興味深いお話のみならず、古琴の音色を聞いて、貴重な漢籍も拝見させて頂くなど、大変楽しい時間でした。（聞き手：上田遥、写真撮影：野久保雅嗣）

東文研では、5つの部門（汎アジア、東アジア、南アジア、西アジア、新世代アジア）がそれぞれ研究を進めるとともに、所内外で連携したさまざまなプロジェクト（GAS、EAAなど）が動いています。最近の出来事をいくつかピックアップして紹介します。

【受賞】

祝 羽田正名誉教授 令和6年度文化功労者に選出



東文研に勤務された羽田正名誉教授が、令和6年度の文化功労者に選出されましたことを、心よりお祝い申し上げます。羽田先生は、平成元年に東洋文化研究所に着任され、平成21年から24年まで本研究所の所長を務められました。同年東京大学副学長、平成28年同大学理事および副学長に就任し、令和元年に名誉教授となられています。その後も東京大学国際高等研究所東京カレッジ特任教授および東京カレッジ長、大学執行役および副学長を歴任されました。羽田先生はイランを中心とする西アジア史研究で業績を残されたのち、平成17年の『イスラーム世界の創造』（東京大学出版会）出版を契機に、ヨーロッパ中心のこれまでの世界史のあり方を見直す新しい世界史の構築を提唱し、グローバルヒストリー研究を国際的に牽引する研究者として世界史の研究と教育に新しい潮流を生み出されました。

【東文研図書室】

祝 アジア研究図書館分館設立、新たな旅立ちにむけて—

令和6年度から東文研図書室がアジア研究図書館の分館となったことを記念する講演会が2024年12月20日に開催されました。東文研図書室の所蔵資料は、アジア諸地域の政治・経済・歴史・文学・芸術・宗教など様々な分野にわたり、言語も日本語や欧米諸国語はもちろん、中国語・朝鮮語・アラビア語・ペルシャ語・タイ語・トルコ語など多様であることが特徴です。資料の形態も、単行本や雑誌のほか、漢籍・新聞・档案資料・マイクロ資料など様々です。漢籍は、今日では収集困難な資料も多く所蔵しております。現代中国語図書・雑誌を多く収集していることも本図書室の特徴です。南アジアや西アジア関係の資料も豊富に備えています。

<講演会プログラム>

- ◆「東文研図書室のあらまし」小寺敦教授
- ◆「聖地としての東文研図書室：仏典、仏像、仏塔」馬場紀寿教授
- ◆「ダイバー・コレクション：東文研アラビア文字写本群とその電子公開」
太田絵里奈アジア研究図書館 U-PARL 特任助教・森本一夫教授
- ◆「雙紅堂文庫の高崎藩大河内家旧蔵漢籍をめぐる」上原究一准教授



（上）記念講演を行う小寺教授
（下）東文研図書室

【国際シンポジウム】

日韓国交正常化 60周年にむけて—

2024年12月4日、2024日韓国交正常化国際シンポジウムが本学で開催されました。2025年に日韓国交正常化60周年を迎えることをふまえて「持続可能な日韓協力の基盤構築に向けて」をテーマに、韓国人文社会研究会が主催、東文研などが共催となり実施されました。シンポジウムの内容は、外交、安全保障、経済政策、市民社会、保健といった分野にわたり、東文研からは、中島隆博所長が開会挨拶を務め、佐橋亮教授が報告を行いました。



開会挨拶をする中島所長

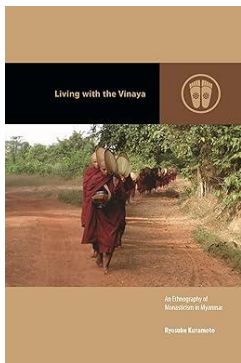
【東文研セミナー】

ネパールの長期的な社会変容を考える—

2025年3月18日、International Workshop on Long-Term Social Transformations in Nepalが東文研で開催されました。

東文研からは名和克郎教授がインド、中国との国境に近い極西部ネパールの村チャングルにおける、過去75年ほどの「政治」の領域のありかたの変容について発表しました。予定時刻を越えて、参加者の活発な議論がなされ、盛況のうちに終了しました。





Ryosuke Kuramoto, *Living with the Vinaya: An Ethnography of Monasticism in Myanmar*, University of Hawai'i Press, 2024.



鈴木真吾『近代オスマン帝国における国家医療の誕生』2024年、慶應義塾大学出版会



中溝和弥・佐橋亮編『世界の岐路をよみとく基礎概念』2024年、岩波書店



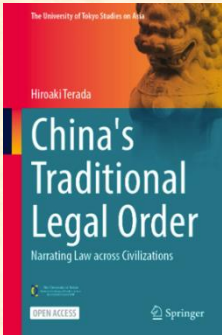
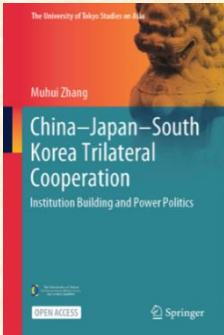
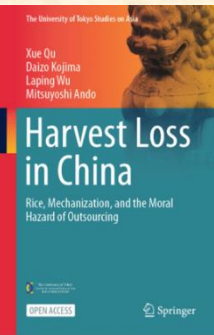
菅丰『江戸饗養録』（中国語翻訳版）2024年、浙江大学出版社



上田通『食の豊かさ 食の貧困』2024年、名古屋大学出版会

【東京大学東洋文化研究所アジア研究叢書】アジアの知を世界の知へ、新刊続々！

アジアでなされている優れたアジア研究の成果を、広く世界の研究者や学生に提供する英文によるアジア研究書シリーズ The University of Tokyo Studies on Asia (UTSA) 『東京大学東洋文化研究所アジア研究叢書』（責任者：松田康博教授）より、前号 Newsletter で紹介した第1巻 *The Semantics of Development in Asia*、第2巻 *Asia Rising* に続き、第3～5巻が Springer からオープン・アクセスで出版されました。



第3巻 2024年12月刊行
Xue Qu, Daizo Kojima, Laping Wu, Mitsuyoshi Ando (eds.)
Harvest Loss in China

第4巻 2025年1月刊行
Muhui Zhang (ed.)
China-Japan-South Korea Trilateral Cooperation

第5巻 2025年5月刊行予定
Hiroaki Terada (ed.)
China's Traditional Legal Order



<https://www.springer.com/series/17024>

東洋文化研究所基金 ご支援のお願い

現在、アジアは世界人口の6割以上を占め、世界の過半の資源を消費しているといわれています。人類の存続を脅かす様々な危機が噴出している現代世界において、西洋中心主義的な諸概念のみならず、アジアに根差した不確実性に対応する知恵をアジアの経験から体系化、普遍化して世界に開くことは社会的要請となっています。東洋文化研究所は、最高水準のアジア研究環境を整備し、世界に開くことで、国際的ハブ拠点機能をさらに強化します。そして、SDGs達成に資する最先端のアジア研究を推進するとともに、国際的な視座を持ったアジア研究者を育成することで、アジア研究の新しい知的展開を促進させるため、このたび特定基金を設置しました。皆様の温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ご寄付の申し込み方法

- ＊本基金へのご寄付には、本基金と東京大学基金の両方の特典が適用されます。詳しくはホームページをご覧ください。
 - ＊寄付特典の発送は日本国内に限らせていただきます。
- <払込取扱票をご利用になる方法> 添付の払込用紙をご利用ください。
<インターネットをご利用になる方法>
東京大学基金 WEB からお申し込みください。

<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt180>

寄付はこちらから→



東洋文化研究所
所長

中島 隆博

東洋文化研究所 Newsletter No.3
2025年春季号（編集担当：上田、寺内）
（写真：野久保雅嗣）
東京大学東洋文化研究所
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
Email: webadmin@ioc.u-tokyo.ac.jp